

破良觀等御書

建治二年

五五歳

良觀・道隆・悲願聖人等が極楽寺・建長寺・寿福寺・普門寺等を立て、叡山の円頓大戒を蔑如するがごとし。此は第一には破僧罪なり。二には仏の御身より血を出だす。今の念仏者等が教主釈尊の御入滅の二月十五日ををさへとり阿弥陀仏の日とさだめ、仏生日の八日をば薬師仏の日といひ、一切の真言師が大日如来をたのみて、教主釈尊は無明に迷へる仏、我等が履はきものとりにも及ばず、結句は灌頂かんじょうして釈迦仏の頭こうべをふむ。禅宗の法師等は教外別伝とのしりて、一切経をばほんく反古劣にはをとり、我等は仏に超過せりと云云。此は南印度の大慢ばら門がながれ、出仏身血の一分なり。第三に蓮華比丘尼を打ちこす。これ仏の養母にして阿羅漢なり。此は阿闍世王の提婆達多をすて、仏につき給ひし時、いかりをなして大火胸をやきしかば、はら腹をすへかねて此の尼のゆきあひ候ひたりしを、打ち殺せしなり。今の念仏者等が念仏と禅と律と真言とをせめられて、のぶるかたはなし、結句は檀那等をあひかたらひて日蓮が弟子を殺させ、予が頭等にきずをつけ、さんそう譏奏をなして二度まで流罪、あはせて頸をきらせんとくはだて、弟子等数十人をろう牢に申し入るのみならず、かまくら鎌倉内に火をつけて、日蓮が弟子の所為なりとふれまわして、一人もなく失はんとせしが如し。

而るに提婆達多が三逆罪は仏の御身より血をいだせども爾前の仏、久遠実成の釈迦にはあらず。殺羅漢しらかんも爾前の羅漢、法華経の行者にはあらず。破和合僧も爾前小乗の戒なり、法華円頓の大戒の僧にもあらず。大地われて無間地獄に入りしかども、法華経の三逆ならざれば、いたう甚も深くあらざりけるかのゆへに、提婆は法華経にして天王如来とならさせ給ふ。今の真言師・念仏者・禅・律等の人々並びに此を御帰依ある天子並びに將軍家、日本国の上下万人は、法華経の強敵ごうてきとなる上、一乗の行者の大怨敵となりぬ。されば設たとひ一切経さとを覚り、十方の仏に帰依し、一国の堂塔を建立し、一切衆生に慈悲ををこすとも、衆流大海に入りてかんみ鹹味となり、衆鳥須弥山に近づきて同色どうしきとなるがごとく、一切の大善変じて大悪となり、七福かへりて七難をこり、現在眼前には他国のせめきびしく、自身つわものは兵にやぶられ、妻子は敵にとられて後生ごしょうには無間大城おに墮つべし。此をもってをもうに、故弥四郎殿は設いひ大罪なりとも提婆が逆にはすぐべからず。何に況んや小罪なり。法華経を信ぜし人なれば無一不成仏疑ひなきものなり。

疑って云はく、今の真言師等を無間地獄と候は心得へられぬことなり。今の真言は源弘法大師・伝教大師・慈覚大師・智証大師此の四大師のながれなり。此の人々地獄に墮ち給はずわ、今の真言師いかで墮ち候べき。答へて云はく、地獄は一百三十六あり、一百三十五の地獄へは墮つる人雨のごとし。其の因やすきゆへなり。一の無間大城へは墮つる人かたし。五逆罪を造る人まれなるゆへなり。又仏前には五逆なし。但殺父・殺母しぶしもの二逆計りあり。又二逆の中にも仏前の殺父・殺母は決定けつじょうとして無間地獄へは墮ちが

たし。畜生の二逆のごとし。而るに今日本国の人々は又一百三十五の地獄へはゆきがたし。日本国の人々形はことなれども同じく法華經誹謗の輩なり。日本国異なれども同じく法華誹謗の者となる事は、^{みなもと}源 伝教より外の三大師の義より事をこれり。

問うて云はく、三大師の義如何。答へて云はく、弘法等の三大師は其の義ことなれども、同じく法華經誹謗は一同なり。所謂善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵の法華經誹謗の邪義なり。

問うて云はく、三大師の地獄へ墮つる証拠如何。答へて云はく、善無畏三蔵は漢土・日本国の真言宗の元祖なり。彼の人すでに頓死して閻魔のせめにあへり。其のせめに値ふ事は他の^{とが}失ならず、法華經は大日經に劣ると立てしゆへなり。而るを此の失を知らずして、其の義をひろめたる慈覚・智証、地獄をまぬがるべしや。但し善無畏三蔵の閻魔のせめに^預あづかりし故をだにも^尋たづね^明あきらめば、此の事自然に^筋頭はれぬべし。善無畏三蔵の鉄の縄七^筋すぢづきたる事は、大日經の疏に我とかゝれて候上、日本醍醐の閻魔堂、相州鎌倉の閻魔堂にあらわせり。此をもって慈覚・智証等の失をば知るべし。

問うて云はく、法華經と大日の三部經の勝劣は經文如何。答へて曰く、法華經には諸經の中に於て最も其の上に在りと説かれて、此の法華經は一切經の頂上の法なりと云云。大日經七卷・^{こんごうちょう}金剛頂經三卷・^{そしつじ}蘇悉地經三卷已上十三卷の内、法華經に勝ると申す經文は一句一偈もこれなし。但^{ただ}蘇悉地經計りにぞ三部の中に於て此の經を王と為すと申す文候。此は大日の三部經の中の王なり。全く一代の諸經の中の大王にはあらず。例せば本朝の王を大王といふ。此は日本国の内の大王なり。全く漢土・^{がっし}月支の諸王に勝れたる大王にはあらず。法華經は一代の一切經の中の王たるのみならず、三世十方の一切の諸仏の所説の中の大王なり。例せば大梵天王のごときんば諸の小王・^{びやくにん}轉輪王・四天王・^{ぶつち}釈王・魔王等の一切の王に勝れたる大王なり。金剛頂經と申すは真言教の頂王、最勝王經と申すは外道・天・仙等の經の中の大王、全く一切經の中の頂王にはあらず。法華經は一切經の頂上の^比宝珠なり。論師人師をすてゝ専ら經文をくらべばかくのごとし。

而るを天台宗出来の後、月氏よりわたれる經論並びに天竺・漢土にして立てたる宗々の元祖等、修羅心をさしはさめるかのゆへに、或は經論にわたくしの言をまじへて事を仏説によせ、或は事を月氏の經によせなどして、私の筆をそへ仏説のよしを称す。善無畏三蔵等は法華經と大日經との勝劣を定むるに理同事勝と云云。此は^{ぶつち}仏意にはあらず。仏説のごとくなれば大日經等は四十余年の内、四十余年の内にも華嚴・般若等には及ぶべくもなし。但阿含小乘經にすこしいさてたる經なり。而るを慈覚大師等は此の義を弁へずして、善無畏三蔵を重くをもうゆへに、理同事勝の義を実義とをもえり。弘法大師は又此等には^{びやくにん}にるべくもなき^{びやくにん}僻人なり。所謂法華經は大日經に劣るのみならず、華嚴經等にもをとれり等云云。而るを此の邪義を人に信ぜさせんために、或は大日如来より^{しゃびょう}写瓶せりといひ、或は我まのあたり靈山にしてきけりといひ、或は師の^{けいか}惠果和尚の我をほめし、或は三^こ鈷をなげたりなど申す種々の誑言をかまへたり。愚かな者は今信を

とる。又天台の真言師は慈覚大師を本とせり。叡山の三千人もこれを信ずる上、随って代々の賢王の御世に勅宣を下す。其の勅宣のせんは法華經と大日經とは同醍醐、譬へば鳥の両翼、人の左右の眼等云云。今の世の一切の真言師は此の義をすぎず。此等は螢火を日月に越ゆとをもひ、蚯蚓を華山より高しという義なり。

其上、一切の真言師は灌頂となづけて釈迦仏を直ちにかきてしきまんだらとなづけて弟子の足にふませ、或は法華經の仏は無明に迷へる仏、人の中のえぞのごとし、真言師が履とりにも及ばずなんどふみにつくれり。今の真言師は此の文を本疏となづけて、日々夜々に談義して、公家武家のいのりとがうして、をくの所領を知行し、檀那をたばらかす。事の心を案ずるに、彼の傲慢ばら門がごとく、無垢論師にことならず。此等は現身に阿鼻の大火を招くべき人々なれども、強敵のなければさてすぐるか。而りといへども、其のしるし眼前にみへたり。慈覚と智証との門家等闘争ひまなく、弘法と聖覚が末孫が本寺と伝法院、叡山と園城との相論は修羅と修羅と猿と犬のごとし。此等は慈覚の夢想に日をいとみ、弘法の現身妄語のすへか。仏、末代を記して云はく、謗法の者は大地微塵よりも多く、正法の者は爪上の土よりすくなかるべし。仏語まことなるかなや。今日本国かの記にあたり。

予はかつしろしめされて候がごとく、幼少の時より学文に心をかけし上、大虚空蔵菩薩の御宝前に願を立て、日本第一の智者となし給へ。十二のとしより此の願を立つ。其の所願に子細あり。今くはしくのせがたし。其の後、先づ浄土宗・禅宗をきく。其の後、叡山・園城・高野・京中・田舎等処々に修行して自他宗の法門をならひしかども、我が身の不審はれがたき上、本よりの願に、諸宗何れの宗なりとも偏党執心あるべからず、いづれも仏説に証拠分明に道理現前ならんを用ふべし、論師・訳者・人師等にはよるべからず、専ら經文を詮とせん。又法門によりては、設ひ王のせめなりともはゞかるべからず、何に況んや其の已下の人をや、父母師兄等の教訓なりとも用ふべからず、人の信不信はしらず、ありのまゝに申すべしと誓状を立てしゆへに、三論宗の嘉祥・華嚴宗の澄観・法相宗の慈恩等をば、天台・妙楽・伝教等は無間地獄とせめたれども、真言宗の善無畏三蔵・弘法大師・慈覚・智証等の僻見はいまだせむる人なし。善無畏・不空等の真言宗をすてゝ天台による事は、妙楽大師の記の十の後序並びに伝教大師の依憑集にのせられたれども、いまだくはしからざればにや、慈覚・智証の謬誤は出来せるかと強盛にせむるなり。

かく申す程に、年三十二建長五年の春の比より念仏宗と禅宗等とをせめはじめて、後に真言宗等をせむるほどに、念仏者等始めにはあなづる。日蓮いかにかしこくとも明円房・公胤僧上・顕真座主等にはすぐべからず。彼の人々だにもはじめは法然上人をなんぜしが、後にみな墮ちて或は上人の弟子となり、或は門家となる。日蓮はかれがごとし。我つめん、我つめんとはやりし程に、いにしへの人々は但法然をなんじて、善導・道綽等をせめず。又經の権実をいはざりしかばこそ、念仏者はをごりけれ。今日蓮は善導・

法然等をば無間地獄につきをとして、専ら浄土の三部経を法華經にをしあはせてせむるゆへに、螢火に日月、江河に大海のやうなる上、念仏は仏のしばらくの戲論けろんの法、実にこれをもって生死をはなれんとを思思もわば、大石を船に造りて大海をわたり、大山を荷になて険難を越ゆるがごとしと難ぜしかば、面おもてをむかうる念仏者なし。

後には天台宗の人々をかたらひて、どうしうち同志打にせんとせしかども、それもかなはず。天台宗の人々もせめられしかば、在家出家の心ある人々、少々念仏と禅宗とを捨すつ。念仏者・禅宗・律僧等、我が智力叶はざるゆへに、諸宗に入りあるきて種々の讒奏ざんそうをなす。在家の人々は不審あるゆへに、各々の持僧等、或は真言師、或は念仏者、或はふるき天台宗、或は禅宗、或は律僧等をわきにはさみて、或は日蓮が住处に向かひ、或はかしこへよぶ。而れども一言二言にはすぎず。迦旃延かせんねんが外道をせめしがごとく、徳慧菩薩とくえが摩沓婆まをつめしがごとくせめしゆへに、其の力及ばず。人は智かしこき者すくなきかのゆへに、結句けっくは念仏者等をばつめさせて、かなはぬところには大名してものをばへぬ侍さむらいども、たのしくて先後も弁へぬ在家の徳人等こそ拳こぞって日蓮を怨あだするほどに、或は私ろうぜきに狼藉をいたして日蓮がかたの者を打ち、或は所ををひ、或は地をたて、或はかんたう勘当をなす事かすをしらず。上に奏すれども、人の主となる人はさすが戒力といひ、福田と申し、子細あるべきかともをひて、左右なく矢にもなされざりしかば、きりものどもよりあひて、まちう町人ど等をかたらひて、数万人の者をもって、夜中にをしよせ失うしなはんとせしほどに、十羅刹の御計らひにてやありけん、日蓮其の難を脱れしかば、両国の吏心りころを合あはせたる事なれば、殺されぬをとが咎にして伊豆の国へながされぬ。最明寺殿計りばかこそ子細あるかともをわかれて、いそぎ急許ゆるされぬ。

さりし程に、最明寺入道殿隠れさせ給ひしかば、いかにも此の事あしくなりなんず。いそぎ隠かくるべき世なりとはをもひしかども、これにつけても法華經のかたうどつよくせば、一定事じょうこといで来たるならば身命しんみょうをすつるにてこそあらめと思ひ切りしかば、讒奏の人々いよいよかすをしらず。上下万人皆父母のかたき、とわりをみるがごとし。不輕菩薩いおんのうぶつの威音王末のすへにすこしもたがふ事なし。